

2002年度 海外学会派遣プログラム参加報告

孫 艶萍	「第40回日本ME学会大会」	-----42
ルイン ユ ティ	「夢が叶った」	-----44
コストブ ブラホ	「素晴らしい会議、おいしい食事」	-----45
武 玉萍	「ハワイ」	-----47
ボルジギン ブレンサイン	「戦時下のアメリカ訪問記」	-----49

「第40回日本ME学会大会」

孫 艶萍

博士(医学) 東京大学
ハーバード大学ブリッグス病院放射線科研究員(在ボストン)
1998年度奨学生

第40回日本ME学会大会が、2001年5月9日～11日、名古屋国際会議場で開かれ、私も渥美奨学財団より補助を受け参加させていただくことができました。今回はそのときの一部始終を報告させていただきます。日本ME学会は「医用電子と生体工学」についての日本国内最大、4500人の会員を有する大きな学会です。毎年4月から5月にかけて大会が開かれます。思えば私の日本での留学生(東京大学大学院生)時代に初めて日本語で学会発表をしたのも1997年のこの学会(第36回)でした。

現在、私は米国ボストンに在住しており、まず学会参加のためにビザを取得することが必要でした。このため演題がアクセプトされた1月から準備をはじめました。主催者である名古屋大学の事務局に、ビザが必要な旨メールをおくり、主催者名(名古屋大学・鳥脇先生)での Invitation letter を作製していただき、ボストンまで送付していただきました。この Invitation およびいくつかの書類を在ボストン日本領事館に提出し、日本入国のビザを取得しました。ビザ取得後、飛行機のチケットを手配しました。

2001年5月6日、ボストン発シカゴ行きアメリカン航空機に乗り込み、日本へと向かいました。シカゴで成田行き日本航空機に乗り換え、翌日5月7日、日本に到着しました。到着時に lost baggage というトラブルに見舞われ、空港到着は午後1時でしたが、実際に成田エクスプレスに乗れたのは午後4時近くになってしまいました。結局、当日は荷物が見つからず、貴重品などの身の回りのものだけでしばらく過ごす羽目になってしまいました。荷物の

中には発表用のポスターも入っており非常に困りましたが、航空会社はしっかりした対応をとらずアメリカン航空に責任をなすりつけるなど、この際の対応は気持ちのいいものではありませんでした。

当日は友人の家にお世話になり対応を考えることになりました。

学会発表のポスターは友人宛にメールで送っていただいたのが幸いして、翌日5月8日、母校東京大学の研究室で出力する事ができ、発表が出来ないという最悪の事態は避けられました。ただ発表の日は翌5月9日でありギリギリでした。8日には今西先生と昼食をご一緒することもでき、楽しいひとときを過ごさせていただきました。また東京大学の大学院の学生時代を過ごした研究室で、指導教官をはじめ懐かしい先生方にお会いできたのも嬉しいことでした。

翌5月9日(水)、9時30分からの開会式に間に合うよう、朝7時の東京発の新幹線で名古屋へ向かいました。まだ荷物は見つからず、友人にスーツを借りて行くという状態でした。名古屋着8時30分、名古屋国際会議場着9時で、開会式に間に合いました。私の発表は当日9日の午後からのポスターセッションでした。まず自分のポスターを貼ったあと、午前中は「生体計測」の演題を聞きました。午後は午後2時から午後4時の間、ポスターの前で発表・質疑応答がありました。発表題名は「マウスを用いたヒトU87神経膠腫モデルのMRIによる計測：Quantitative MRI for brain tumor study using human U87 glioblastoma in a mouse model」でし

た。いくつかの質問がでて、有意義な討論ができました。また同じセッションで発表されていた、他の同分野の研究内容ではMRI画像を使った三次元モデルなどの発表があり、非常に参考になりました。



今回の私の発表内容は次のようでした。

「MRIを用いてU87神経膠腫マウスモデルにおける腫瘍の成長および治療効果を観察することを目的とし、腫瘍の大きさおよび正常組織・腫瘍組織・周辺浮腫のT1・T2値の計測を行った。U87細胞注入後のGdエンハンスT1強調像では、腫瘍は周辺組織に比べてエンハンスされた高信号域・高コントラストで描出された。3次元レンダリング画像では腫瘍形状が鮮明に描出でき、腫瘍体積は28.2mm³であった。3次元レンダリング画像では腫瘍の形状や大きさについて、これまでのMRIでは得られないより多くの情報を得られた。また病理組織学的検索と比較することにより、MRI画像の妥当性も評価できた。腫瘍の体積を時系列で計測することにより治療効果判定の指針として使用できることが分かった。」

そのほかには「バーチャルリアリティ」のセッションを聞きました。Open MRIや超音波診断システムなどの興味深い話が聞けました。「計測機器開発」「生体計測システム」のセッションでは、MRIを使った酸化ストレス病態モデルの画像解析などの発表がありました。

スーツケースは、航空会社に何度か電話した後、ようやく見つかり、友人の家に送られてきました。スーツケースの留め金がひどく壊れており、ふたがちゃんとしまらないひどい状態でした。

日本での何人かの友人の家に伺い旧交を温めました。

荷物がなくなったことなどハプニングがあった旅でしたが、おかげさまで無事に学会発表もでき、また何よりもこの様な機会がなければ、なかなかお会いすることができない日本の先生方・友人に会え、とても収穫の多い旅になりました。

夢が叶った

ルイン ユ ティ
Lwin U Htay

博士（医学）東京医科歯科大学
独立行政法人国立健康・栄養研究所流動研究員 / 学術振興会外国人特別研究員
2001年度奨学生

私は2002年8月（財）渥美国際交流奨学財団のサポートにより第16回世界疫学会議で博士論文を発表するという素晴らしい機会を得ることが出来ました。

この会議はカナダで開催され、世界各国から多くの学者が参加するというものでした。日本以外の国で、しかも世界各国の学者の前で論文を発表することは、私の永年の夢でした。



私は今までアジアの国々へは何度か旅をしたことはありましたが、アメリカ大陸への旅は今回が初めてで少し緊張しました。期待と不安をかかえた私は8月15日午後5時カナダ航空に乗り込みトロントへと向かいました。

13時間という初めての長旅、夏休みということで満席の機内。しかし、そんな憂鬱な気分や疲れもトロントに到着すると一瞬にして吹き飛んでしまったのです。それは夢であった学会での発表が遂にできるという嬉しさ、そして飛び込んできたトロントの美しい風景のおかげでした。その後タクシーにの

り、トロント・イン・ホテルへ向かいました。

セミナーが行われる迄の1日間、時間がありカナダとアメリカの国境にある美しいナイアガラの滝を見ることができました。

次の日はトロントでのセミナーに参加しました。18日は本会議が行われるため、早朝、モントリオールへと出発しました。会議が行われた場所はホテルから歩いて10分程度の所にあり、近くの中華街で昼ごはんを簡単にすませ、会議場へと急ぎました。会議では、遺伝子と病気の関係についてのセミナーに参加し、セミナー参加の証明書も戴くことができました。再び夕方中華街へと観光に行きたいところでしたが、晩御飯を早めに済ませ、翌日の発表の準備をしました。



翌朝、私の発表に対して大勢の研究者から高い関心をうけ、発表は大成功に終わりました。セミナー終了後、1976年にオリンピック大会が行われた場所である、モントリオールドームへ観光に行きました。その優れた建築技術は感動的なもので、今で

もその姿をはっきりと思いだすことができます。最終日は遺伝に関する弁論会があり、それは私にとって大変興味深いものとなりました。このようにして3年に1回行われる世界会議は無事終了しました。今回の学会は私にとって学問的知識を多く吸収で

きただけでなく、論文を世界各国の学者の前で発表し、交流を持つことができたという意味でも大変有意義なものとなりました。渥美財団の方々のサポートが成功へと導いてくれたものと確信しています。

素晴らしい会議、おいしい食事そして風味豊かなワイン *Bella Italia*

ブラホ コストフ
Vlaho Kostov

博士（工学システム）東京都立科学技術大学
松下電器産業株式会社先端技術研究所（在奈良）
2001年度奨学生

「知識ベースのインテリジェント情報工学システム会議」すなわち「KES会議」 Knowledge-Based Intelligent Information & Engineering Systems は、人工知能を適応した研究分野における特別な行事として、定期的に行われてきました。この会議は、最近の研究発表や知的システムと技術、知的技術の応用、さらに情報技術やインターネットを含む関連分野に関する意見交換などをするための国際的な会議の場です。

「KES会議」は、私の研究課題、特に「人間中心の知的システム」と非常に関係があるので、私は昨年、大成功のうちに終わった大阪での「KES 2001会議」にも出席しました。それ故、今年「KES 2002会議」が開かれることを、そしてそれに再び参加して議論をかわしたり、世界各地の創意豊かな研究者たちと最新の情報や研究成果を交換し合う機会があることを、私は心待ちにしていました。

「KES国際会議」は第6回を迎え、イタリアのクレマ、Podere d'Ombriano で、2002年9月16日から18日にかけて開催され、今回はミラノ大学によって主催されました。会議の主な内容は基調講演と10の一般講演、66の招待講演から成る、

わくわくするようなプログラムで構成されていました。



Podere d'Ombriano の前、クレマ

この会議に関する一般的な分野の全ての論文が、著名な研究者が議長をつとめる全体会議で発表されました。専門分野に関するさらに専門的な論文は、別の招待講演において発表され、それらの会議もまたその分野の著名な研究者たちによって進行されました。議題は主として一般的な知的技術を含む知識ベースの知的情報システムの理論と応用についてでした。つまり、人工ニューラルネットワーク、機械

学習、知識ベースとエキスパートシステム、ファジー・ニューロファジー技術、遺伝的アルゴリズム、人工生命と知的エージェントです。知的システムの応用を網羅する議題は工業制御、医学と診断システム、画像処理、機械とコンピュータービジョン、音声処理と合成などです。さらに同類の科学技術として、通信伝達、コンピューターコミュニケーション、仮想現実、マルチメディア、インターネット・ウェブベース技術、ヒューマンコンピューターインターフェース、電子ペットなどです。

「KES 2002 会議」が開催された Podere d'Ombriano は、かつての代表的、そして伝統的なロンバルディア（イタリア北部地方）の農家で、現在は美しいリゾートゴルフ場になっています。クレマ市街にほど近い、ロンバルディア地方のすばらしい環境の中にあり、ミラノ大学の新キャンパスのすぐ近くです。そしてミラノの南東 40 km、リナーテ国際空港から 30 km の所に位置しています。

クレマは芸術的、文化的な見所の多い、閑静な小都市です。この都市の記録に残っている歴史は 1052 年に始まりますが、実際にはそれよりずっと以前、つまり、西ローマ帝国の滅亡（紀元前 476 年）からすでに存在していました。長い歴史の間、この地はさまざまな軍によって何度も征服されました。長く血塗られた包囲攻撃の後、1449 年にベネチア軍によって占拠されました。ベネチア人による支配の期間は比較的平和で、1797 年まで続きました。そして、その年、フランス軍が突如クレマを侵略し、オーストリア・ロシアが占領（1799 - 1800）した 2 - 3 ヶ月間を除き、ナポレオン帝政が崩壊するまでずっとクレマを支配していました。

今日クレマには芸術的な関心を引く建築物が数多く建っています。もし城壁内の歴史的な中心部を見るだけなら、狭い範囲なので歩いて楽に見てまわることができます。また、是非そうするべきだと思います。この町の小さくて静かな通りを歩くことは、中世の都市の中にいるような気分になり、そして新しいものと古い建造物とが非常によく調和し、美し

さを呈しているこの地をよく知り得る唯一の方法なのです。

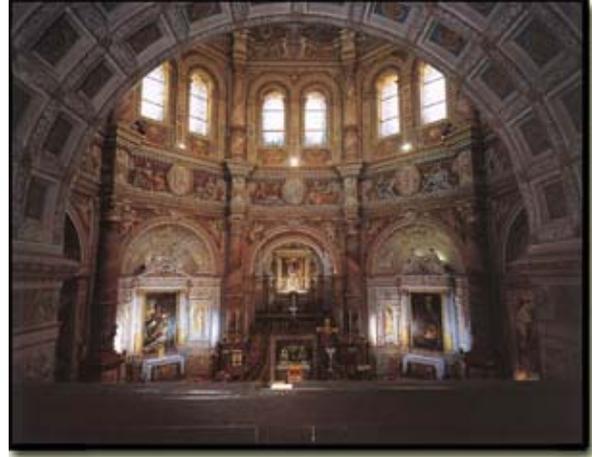
最も重要な建造物は the Cathedral 「Duomo」、S.Mary of the Cross 「S. Maria della Croce」と Holy Trinity 「SS. Trinita'」です。



Piazza Duomo, クレマ



SS. Trinita', クレマ



S. Maria della Croce, クレマ

ハワイ

ウイ
武 玉萍

博士（医学）千葉大学
国立佐倉病院臨床研究部リサーチレジデント
2000年度奨学生

2003年1月18日から23日にかけて開催されたAACR「Molecular and Genetic Epidemiology」に参加した。会場となったのは、ハワイ・コナのHilton Waikoloa Village ホテルだった。到着したコナ空港の気温は25℃、一歩コナ空港を出ると期待を裏切らない暖かさで私の心は一気に南国モードとなった。

ハワイはご存知のように有名な観光地である。特に日本人の方々がよく訪れる場所でもある。今回私も学会のおかげで、ハワイの風を感じることができた。

着いたのは当地の朝8時だった。時差で眠いけれども、新しい環境に入ったため、とても元気だった。夕方からセッションが始まるので、その間はあまりやることなく、コナの町を歩いてみた。ジョキングしている人がたくさんいて、傍を通りかかった時

親切に挨拶してくれて、気持ちがとてもよかった。足がだんだん痛くなってきた時、ファースト・フードのお店が現れた。そこで、The American をひとつ頼んで、食べながら、目の前の海を眺めて、休憩した。境が見えないほど青色の海で、波もそんなに強くなかった。雲がぜんぜん見えない青空の下で、椰子の木の葉がやわらかい風に吹かれて、たまに動いていた。新鮮な空気を吸いながら、周りを見ると小鳥さんまでものんびりしている様子だった。その後海岸沿いをタクシーに乗せてもらって、軽快にHilton Waikoloa Village に到着した。ロビーで名札を受け取り「さあ、がんばるぞ！」と心に誓った。

今度の学会は癌の疫学研究がメインとなっていた。具体的に言うと癌患者（乳がん、前立腺癌など）の病例数を増やした上で、癌遺伝子の変化や突然変異

などを分子レベルで統計的に研究を行い報告したのが多かった。いざセッションが始まり発表者たちの熱のこもった議論の世界へ誘われているうちに第一部は瞬く間に終了した。その後開かれた、満天の星空のもと海を望んだガーデンでの一日目の懇親会は開放感にあふれていてお料理も充実している思わずおなかいっぱい食べてしまった。

懇親会で知り合った広島放射線研究所の中地先生はとても親切で、初めて英語圏の学会に参加した私にいろいろ教えてくれた。それに、私を Angie Stone さんに紹介してくれて、彼女と友達にもなった。



Angie Stone さんは Central Arkansas Veterans Healthcare System に属し、CYP3A43 Genetic Polymorphism の研究をしている。私たちは泊まっていたホテルが近かったので、毎朝彼女の車に乗せてもらって会場に行きとても楽しかった。

会期中、中国医学科学院腫瘍研究所の林東昕主任にも出会った。林先生は7年前までずっとアメリカの研究所で仕事をしていて、その後決心して帰国した。今博士課程の学生の指導をしながら自分の研究を進めているところである。林先生から聞いた話では、中国では、長年国際誌で研究成果を発表することをあまり重視しなかった。今こそ、中国の研究者たちはその考えを変えて英語で論文を作成し、インパクトファクターの高い国際誌に投稿できるように努力している。中国のサイエンス界が若い人たちを育てようという気持ちがとても伝わってきて、なんだか元気をいっぱいもらった。

短い昼休みの休憩時間に、私は会場を出てすぐの

ビーチに足を伸ばしてみた。ぱっと出るとそこはさわやかな海風が吹いていて、会場でほてっていた頭をうそみたいにクールダウンさせてくれた。さすが南国リゾート地！まず都会の会場ではこういかないだろう。ホテル観光用の電車にも乗って、Hilton の中を散策してみると、日本庭園まで作られていて、金魚が池で自由自在に泳いでいた。

私は今回「Involvement of human heat shock protein90 in nicotine-induced apoptosis」というタイトルでポスター発表してきた。発表の場でさまざまな研究室からの質問を受けると、普段自分が見過ごしている盲点を突かれることもあり勉強になった。また自分の研究室では使っていない手法や、思っても見なかった切り口の提示もあり、今後研究を進めるに当たっての力強い助けとなった。同時に、自分の研究室の特色が浮き彫りになり、この分野での自分の仕事の位置づけが明確になった。セッションではこの分野でホットなトピックスを一気にまとめて話していただけるので、頭が整理しやすくわかりやすく、貴重な機会だった。

ハワイの天気にも恵まれて、学会も順調に進んだ。充実した（楽しかった）学会の日々に無理やりサヨナラを言い、訪れてみたかったハワイの海を眼下に眺めながら日本へ帰って来た。

今回渥美国際交流奨学財団の海外学会派遣プログラムのおかげで、自分の研究視野がだいぶ広がってきて、今後の研究生涯にますます自信を持って力を入れようと決心した。世界中の研究者とは競争の相手でもあり、友達でもあるという意識にもなってきた。本当にありがとうございました。

戦時下のアメリカ訪問記

ボルジギン プレンサイン
Borjigin, Burensain

博士（東洋史）早稲田大学

早稲田大学モンゴル研究所客員研究員 / 日本学術振興会外国人特別研究員

2001年度奨学生

2003年3月26日から10日間のスケジュールでアメリカに出掛けてきた。年に一度開催されるアメリカのアジア学会（AAS）とアメリカン・モンゴル協会（AMS）の共同主催による「モンゴルと国際社会」というパネルに発表者として参加するためである。

アメリカのアジア学会は200以上ものセッションをもつアジア研究に関するもっとも大きなイベントであり、アジア各国の出版社による書籍展示会などを含めると、まさにアジア研究博覧会のようなもので、ニューヨークのヒルトン・ホテルを埋め尽くすほどの盛況ぶりだった。他の各セッションと同様、モンゴル・セッションも3日間（3/27～3/29）にわたってモンゴル研究に関してテーマ別に部会が開かれ、私は「Social and Political Transformation of the Mongols in China in the 20th Century」とする部会に「Peasant Uprising or Ethnic Conflict? Reexamining the Jindandao Incident in 1891」というテーマの発表を行った。

周知のように、3月20日から米英による対イラク戦争が開始され、今回はまさに戦争の最中において戦争当事国にわたるというものであった。アメリカへの報復テロ攻撃を恐れて、アメリカ行きの多くの団体や個人が旅行をキャンセルし、一緒に行く予定だった仲間からもキャンセルする人が出ていた時期だけに、今まででもっとも重い気持ちで飛行機に乗ったことは、多分一生忘れないであろう。ニューヨークに到着すると空港では予想通りの厳しいチェックを受け、地下鉄の駅などでも警察とは別に銃を

持った兵士が巡回し、さすが戦時中だ、という物々しい雰囲気が漂っていた。

ところが市内に入り、街を歩くと状況は一転する。人々はいつもの通りの生活を楽しみ、激しい空爆の中を怯えながら生き残りを祈るバグダッドの市民とはまるで別世界に住む人々のようであった。アメリカ人は戦争に参加するというと、いつも飛行機に乗って遠いところに行って戦うというイメージが定着しているようで、本土に暮らす人々には、「戦争は直接関係ない」という顔をして慣れていることを実感した。

学会を終えてアメリカ在住の友人を訪ねて幾日間は旅をした。十数年も会っていないというのに最初の話題がイラク戦だった。中国出身の彼は長いことアメリカに住んでいるが、最近目に見えない恐怖と抑圧を感じるようになったという。戦争がまだ現実となる前に、彼は会社の同僚と開戦すべきか否かに関して熱い議論を交わし、「愛国心」に燃えていた同僚に「アメリカへの忠誠を疑われる」など、かなりきついことを言われ、それ以後戦争について話すのが嫌になり、テレビを見るのも避けるようになったという。静かな住宅地に住んでいながら、毎日「疑わしい情報」を警察に通報する住民が増え、住民同士で互いに警戒する目線を送るようになったと彼は話し、「まるで昔中国にいた時みたい」と付け加えた。世界中の人々がアメリカを憧れるのは、そこは何処よりも自由な国だからだといわれてきた。その点私も疑わないが、しかし大国にとっての「愛国心」とは一体何を意味するものなのか、考えるのも怖くなってきたような気がする。